

横山隆一
第二隨筆でんすけ隨筆
四季社版



検印
廃止

著者略歴

○明治四十三年五月高知県生。
城東中学卒業後上京して本山
白雲門下に入り、後、岡本一
平に師事す。

○昭和十年朝日新聞に連載長篇
漫画「江戸ツ子健ちゃん」及
「フクちゃん」を執筆。戦后
は毎日新聞に「デンスケ」を
執筆二千百回に垂んとす。○
漫画集団幹事。著者「でんす
け随筆」代表的漫画「江戸ツ
子健ちゃん」「フクちゃん」
「デンスケ」その他多数。

第二・でんすけ随筆

昭和三十年九月二十日 印刷
昭和三十年九月三十日 初版発行

定価 一三〇圓

著者 横山隆一

発行者 松本國雄
東京都中央区新富町二ノ二

印刷者 草刈親雄
東京都新宿区市ケ谷台町一

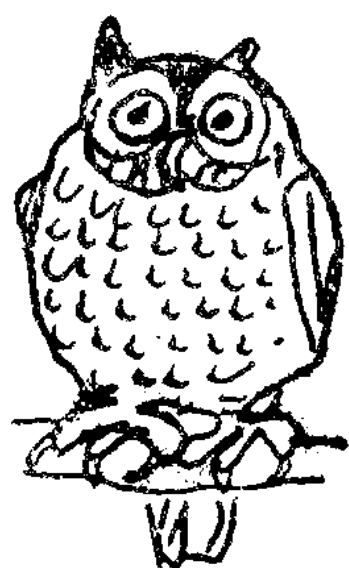
発兌 株式 四季社
東京都中央区新富町二ノ二

電話築地(55)二六三四
振替東京二〇一九三

(落丁乱丁等の場合は本社
にてお取替いたします。)

でんすけ随筆

横山隆一



四季新書

でんすけ隨筆・目次

I

二貫目の鯉……………	9
どじようすくい……………	13
おんな弟子……………	16
金魚の養老院……………	21
わが動物記……………	23
臭い手紙……………	25
やせがまん……………	27
テレビジョン……………	30
球根さいばい法……………	34

おせつかい	38
珍コレクション中間報告	42

Ⅱ

夢の台所てんまつ記	55
屋根裏の僕	61
便利釜	64
青のり	66
カクテル	69
洋服と不服	71

Ⅲ

本山白雲先生	75
フクちゃん誕生記	78

ダンスケ誕生記 85

古いノートから 111

会計の机 123

ショウ子さん 126

ウィーク・デイ娯楽版 129

幸運 131

僕の見る泰三君 135

IV

僕の日市長 143

岐阜市長 143

金澤市長 148

恥のかきぞめ 155

猪野猪五郎	168
あじさい物語	174
ガラビ殺人事件	181
九平漂流記	188

著者自装

I



二貫目の鯉

僕は釣が下手である。その癖、釣は好きだ。淋しがり屋だから、人の居ない河原などで独り釣を楽しむ、などと言う事は僕には出来ない。夜釣など真平である。なるべくにぎやかな釣をしたい。そもそも、それが釣れない原因である。

魚を追つて、どこまでも行くと云う精神はない。

向うの方から来てくれるか、或は通りがかりの魚が、かかつてくれるのを待つ程度である。

土佐のニロギ釣などは、にぎやかな釣の代表的なものである。釣舟が沢山出て、どの舟からも笑い声がする。釣られるニロギと言う魚も、可愛い顔で、太陽にキラキラ銀色に光つて陽気である。僕は、外海へとても恐ろしくて出る気がしない。その昔、僕は母方の親類の持船に乗っていた漁師が流された話を、子供の頃から聞かされていた。

その漁師が有名な中浜万次郎、つまり「ジョン万次郎」である。

だから外海は恐ろしい。先達つて土佐へ行つた時、かねがね僕は釣がしたいと言つてあつたので友人が早速、舟を出してくれた。戦時の大発位の大きな船で、焼玉エンジンである。運転手と機関手がつき、土地の案内人と僕と友人の五人が弁当を積んで出港した。外海である。友人は安全を期して、そんな大きな船を用意してくれたのだろうが、僕には、かえつてそれが心配だつた。つめこめば二百人も乗れる様なこんな船に、五人と言うのが心細い。エンジンでも止ると漕ぐなんてことは、不可能だ。

僕は運転手にたのんで、なるべく漁船が集つてゐる所へ、やつて貰つた。

あじ釣の連中は、大きな船を真ん中へわつて入れたので、ぶつぶつ不平をいいはじめた。

僕は、漁師のきげんをとるつもりで、釣つた魚の画をかいてやつた。

「ありや、この人かのうし、漫画家の横山さんと言うのは」と漁師の若者は大いに喜んで、色々の交つた珍しい小魚を、僕の船へ投げこんでくれた。それをスケッチしている内、釣の方はすっかりお留守になつた。これでは釣は上手にならない。

釣の友は、僕に夜釣をすすめた。僕が、暗いのはいやだ、月夜ならまだしも、と、言つたら、「釣をしよると、こわい事もありますぜよ」と漁師が言つた。ただひとり釣つてゐると、真暗い海面で突然、ドブンとまるで馬か牛を投げこむ様な音がすぐ目の前におこるそうだ。「暗くて何だかわからないが、あんまり気もちのいいもんじやないぜよ」と言う。その話を

聞いただけでも、僕は胆をひやす。僕には、そんな風なスリルは大嫌いである。

だから結局、僕に一番向いたのは釣り堀である。

鎌倉に釣堀が昨年出来た。

開店した三日目に僕がその釣堀を発見して、早速、那須良輔君を誘つて行つた。

雨の日で釣堀は休みだつた。しかし宣伝の意味で無理にたのんで開いて貰つた。

釣糸をたれたが、ちつとも手ごたえがない。聞いてみると、この池は、もとは滑川の支流で、もう何年も釣つていないから、二貫目位の鯉が、十匹やそこらは居る筈だと言う。その日、僕は七寸位の鮒を釣り上げてかえつた。

その話を弟の泰三にすると早速、彼は出掛けていつた。一年たつた今、泰三と那須君は常連となり、ほとんど毎日の様に釣堀りに姿を現わし、一尺位の鯉を、毎日数匹上げぬ日とてはない。

泰三は、問題の二貫目の大物を釣り上げるし、一貫目位は、数回釣つて居る。

那須君の池には、大物の鯉が五十匹もからみあつて、近頃では知人に配給していると言う噂すらある。

それにひきかえ、僕ときたらまるで釣れない。

家の池には、貰つた鯉が沢山いるが、自分の釣つた鯉は、見覚えがある位少い。中でも一

番大きいのは、泰三君の釣つた八百匁ばかりの鯉である。

この前の日曜日、釣れなくて空のビクをさげて帰ろうとしたら、隣りにいた中学生が三寸ばかりの鯉の子をくれた。同情にたえんと言ふ顔をしていた。

つり堀のおやじも「先生に、是非大きい釣つていただきたくないので、今日も大きいのを入れたんで、あと一時間もすれば釣れはじめるんですが」とすこぶる同情的だ。これではとても釣をやつていると人には言えない。

(二十八年五月)

どじようすくい

文芸春秋の秋祭りで文士劇へ出た。

弁天小僧の浜松屋の場で、小僧は川口松太郎で南郷が中野実、番頭永井龍男、三島由紀夫、北条誠、主人宮田重雄、息子岩田専太郎、鳶の頭が、今日出海、アシマ玉川一郎、丁稚が僕と弟の泰三である。

「お祭りと言えば、いつでも居るなあ、俺は」と言う宮田さん。

そうそう配役で一番大物を忘れていた。日本駄衛門の久保田万太郎氏、久保田さんの熱心さには僕達、ただあれまあ、と見とれるばかり。

稽古場の火鉢をかこんで番頭さん達と鳶の今さんが久保田さんの方を指して「隆ちゃん、ごらんよ久保田さんを、よう」見ると久保田さん、エンピツを煙草のきせるになぞらえて、弁天と南郷の芝居へ合せて自分のポーズを研究中である。「なる程ねえ、幕をあげるとああ言う所で上手、下手が別れちまうんだね」

「いや、好きだねえ芝居が」とか、がやがや批評されていることも御本人は気がつかない。

芝居の当日は朝早く集合するので、僕は東京の宿へ泊つた。丁稚の隆松が南郷をお盆でなぐろうとして、南郷ににらまれると、お盆のやり場にこまり、アラエッサッサと、どじようすくいを踊るのが僕の役だ。

どじようすくいなんて踊つた事がないので、教えて貰つたが足のさばきが、思うように行かない。皆の前で稽古するのも照れ臭いので、宿でこつそり稽古する事にした。その夜はともくたびれて居たので注射をして貰つて寝た。次の日は朝五時にめがさめた。外はまだくらい。僕は、枕もとのお盆をとつて、アラエッサッサと、踊りの稽古をはじめた。さむいのでドテラの首すじへ、ワイシャツをえり巻代りにして、見られた姿ではない。気狂いである。

さて、にぎやかに楽屋入り、最後の稽古が終つて、いよいよ本番となつた。

幕があくと、何となく、上気して手足がふるえるが、幸い、丁稚の方は客の視線外にあるので助かつた。

僕が「へーい」と声を出して反物を片づけようとすると、クスクス笑う声が聞える。その声で少しおちついて来た。

ふだん、きちんと座つた事がないので、しびれがきれはじめて、いたくて仕方がない。番

頭さん達の方を見ると、皆んな足をよじらしたり、尻を少し持ち上げたり、大苦勞している。

稽古の時、あぐらをかきながらやつたり、用のない時は、火鉢の方へしがみついて居たのが、いざ芝居となると、ずつと座つていなければならぬ。

そして用がなくても何となく弁天や南郷に合せて芝居をしていなくてはならないのである。ここで久保田さんの稽古ぶりが、はじめて生きて来るのである。

久保田さんはと見ると、小さなふとんをつけた尻台をちゃんと尻に敷いて、涼しい顔である。

成程なあ、と妙なところで感心したり、うらやましがつたりである。

だいぶおちついたので客席を見てギョツとした。

梅原龍三郎、安井曾太郎の先生方や朝野の名士、それもめつたに顔を出さない小泉信三、永井荷風と、いやもう、凄い顔ぶれ。歌舞伎の連中も映画スターもラジオ・スターもギッシリ。

やれやれ、生れてはじめてのどじようすくいを、事もあるうに帝劇の舞台から人様に見せるのか、や、や、や、や、やと何とも表現の出来ない心理状態になつた。

えい、やつちまえ、僕は、アラエッサッサと足を踏み出した。

後から考えると、それも、これも皆んな楽しい一ときであつた。